

平成9年12月8日第3種郵便物認可
令和7年5月31日発行（季刊発行）第167号

HI
HAIKU INTERNATIONAL

2025
No.167



俳句ユネスコ無形文化遺産
登録推進協議会

目 次

CONTENTS

	page
大高霧海先生追悼	2
『幻の大樹』 西村和子	5
俳 句	
HI 選集①カナダ・内モンゴル・ アメリカ・ドイツ・スロベニア・ ヨルダン・台湾	8
HI 選集②～③	11
HI 選集④（自訳）	22
HI 167号 投句作品より	28
選評	
監事 津高里永子	
後記	31
~~~~~	
俳句を身近に感じられるまち	33
“いちかわ”を目指して	
千葉県市川市長 田中 甲	



## 追悼 大高霧海

国際俳句協会会長、大高霧海先生（91歳）は、  
2025年2月28日、ご逝去されました。  
生前のご功績を偲び、謹んでご冥福をお祈りいたします。

In appreciation for the years of great contribution to the association, we regret to announce the passing of Mr.Mukai Ohtaka (91 years old), the president of the Haiku International Association, on 28th February, 2025.



花ひらき野原も山も命みつ  
花浴びて斗志燃えたつ老いてなほ

大高霧海

## 大高霧海先生を偲んで

渋谷区長 長谷部 健

故 大高霧海様のご逝去に対し、ご生前のご厚情に深く感謝するとともに、これまでのご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

大高先生には、「風の道」主宰という、お立場から、「しぶや区ニュース」くみんの俳句コーナーにおいて、約10年 計77回にもわたり応募作品の選者を務めていただきました。毎回50通ほどの応募があり、詠む人の目がどこまで行き届いているか、唯一無二の感性により選評され、区民からもご好評をいただきました。正に人気コラムとして、多くの区民に愛されるコーナーに育て上げていただきました。

他方、文化・法律・教育など渋谷区における数々の要職を歴任され、本区の発展に著しくご貢献いただきました。このご功績は卓越しており、区民の範たるもの、区民の誇りとするものとして令和6年6月、渋谷区議会の同意を得て、同年8月、渋谷区名誉区民に顕彰されました。

渋谷区名誉区民として、変わらず今後も渋谷区政へのお力添えをいただきたいと思うところ、このたびの訃報に接し誠に残念でなりません。

大高先生は、まさに温厚篤実、公明正大、さらに豊富な知見と豊かな感性をお持ちで、誰からも慕われ、頼られるお人柄がありました。

あらためまして、大高先生のご遺徳を偲び、心よりご冥福をお祈りいたします。

大高先生、本当にありがとうございました。

---

## 大高霧海先生を悼む

俳句ユネスコ登録推進協議会会長・「沖」主宰 能村 研三

大高霧海先生は、常に弁護士であり俳人であった。ご自身では「全方位外交」などと冗談めかしておっしゃっていたが、俳句関係のパーティーに現れるときには、いつも穏やかな笑顔で手を上げ皆に挨拶し、優しく公平に接していた姿が印象的であった。また、会議ではその穏やかさを保ちつつ平和的な結論に導くのは、弁護士ならではの熟練の技であったと思う。

大高先生は「風の道」の主宰としても数多くのお弟子さんに慕われていた。亡くなる直前まで、作句を続け、事務所に結社誌の編集に携わる会員の方々を呼んで編集会議を開いていたと後から聞いた。

俳句ユネスコの運動に関して言えば、大高先生は国際俳句協会の会長、私は俳句ユネスコ登録推進協議会の会長として、その両輪を担う立場であったのを、心強く感じていたので、非常に残念でならない。

大高先生の近詠に〈木の芽吹く命ときめく季節来る〉〈新樹光卒寿のわれを輝かす〉とある。最期まで前向きの明るさを失わない見事なご生涯であった。心より冥福をお祈りする。

## 反戦平和を希求した法律家俳人

HIA 会員・「風の道」同人 菊池 热海

「徳は孤ならず必ず隣有り」とは大高霧海先生のような人を言うのだろう。人の縁とは不思議なものである。先生とは温泉で裸のお付き合いから始まった。以来、肩書なしのファーストネームで呼び合う家族ぐるみの輪が広がり、私も含め俳句を全く知らない隣人の余興の座から、知れば知るほど奥の深い短詩文芸の世界に導かれたのである。

ほどなく先生が第五句集「無言館」を上梓された。あとがきに「第二次世界大戦の頃、国民小学校に通い、敗戦の体験が忘れられない。それに広島市の原爆の酸鼻を極める災害を目の当たりにしているので、無言館に対して格別の止むに止まれぬ感情があり」と天遁画学生の美術館にとり憑かれた思いを述べている。その後第七句集『鶴の折紙』のあとがきには、非核平和の尊さと先生の崇高な俳句理念が示されている。反戦平和の希求は法律家俳人として搖るがず先生の人生の原点である。弁護士として多くの功績を残し、地元渋谷区の教育委員長はじめ、福祉、環境、文化、芸術と幅広く地域コミュニティに携わり、昨年名誉区民となった。晩年先生は、闘病生活を余儀なくされても生活のほとんどを俳句に没頭し楽しんでいた。亡くなる直前まで国際俳句協会の会長として、俳句のユネスコ無形文化遺産の登録と国際平和の推進の先頭に立ち続けた斗南一人、まさに巨星墜つである。合掌。

---

## 白の矜持

HIA 会員・「風の道」同人 チョウコ・ビーン

師と吾の誕生日近し鬼やらひ（チョウコ）

この句は2月1日の同人句会で出句し、主宰選を頂いた句です。同じ水瓶座生まれの霧海先生に何時までもお元気でいて欲しい気持ちを込めて詠みました。2月6日生まれの先生も己れを鼓舞するお句を幾つも詠んでおられました。そして、この同人句会が先生との最後の句会になるとは夢にも思いませんでした。

先生との出会いは熱海のリゾートマンションに引越して以来かれこれ35年前になりますが、JALを退職して熱海とゴールドコーストを行ったり来たりする生活の中で、2012年の春から俳句のご指導を受けてまいりました。熱海の別荘へ来られる度に起雲句会のメンバーと吟行に出掛け、帰宅すると直ぐに句会、その後はお食事会と本当に充実した楽しい日々をご一緒させて頂きました。

俳人且つ弁護士である先生はまるで法廷のように自然の営み、人や物の命、社会そして私達の生きている地球、宇宙をも格調高く力強く美しい言の葉でエールを送って頂きました。先生の数多の名句の中で大好きなお句、「沙羅落花白の矜持を失はず」があります。

先生のライフワークの集大成である俳句がユネスコ無形文化遺産に登録されることを祈念しつつ、「とこしなへに白の矜持や梅真白（チョウコ）」を先生に送ります。

霧海先生本当にありがとうございました。

## 『幻の大樹』

国際俳句協会理事 西村和子

ブリュッセルに着いた翌日、EU代表部を訪ね、相川大使とお会いした。いただいた名刺の「特命全権大使」の文字に、10年前の記憶が蘇った。

2014年1月24日、国際俳句交流協会の創立25周年記念シンポジウムが、ブリュッセルで行われた。有馬朗人会長とファンロンパイEU大統領との交流が実って実現したのだった。1日早くベルギー入りしていた私達は、会場準備の打ち合わせのため、EU代表部に当時の塩尻全権大使を訪ねた。打ち合わせが済んで、大使に「俳句に興味はありますか。」と尋ねたところ、「俳句は作ったことがありませんが、私にも詩心はあります。」と言われた。

「公邸の庭に大きな樹があるが、今の季節は全ての葉を落として枯木になって、幹や枝を寒風に晒して耐えている。毎日その姿を見ていると、私の心に訴えるものがあります。」

その詩心が俳句の素になります。「枯木」は季語ですと伝えたところ、大使の目が輝いたように見えたので、全権大使に因んで、「禪剣」という俳号を提案した。俳号は気に入っていただけたようだが、俳句はまだ拝見していない。と話したところ、相川大使は、前々任者の話を懐かしそうに聞いてくださったが、「あの木は残念ながら、その後枯死して伐られてしまったのです。」と語られた。

そのEU大使公邸に於いて、今回の「Haiku Lecture—Mission of Japan to the European Union—」が開催された。2月20日の午後早めに訪ねると、相川大使が会場となる広間の窓を開けて、広い芝生の庭を見せてくださいって、

「あのあたりにその木があったのです。」と左の方を指差し、「大江健三郎さんが短篇に書かれた榆の木ですよ。」と言われた。

広間に用意された椅子は満席となり、ファンロンパイ氏がまず講演をされ

た。10年前のシンポジウムで、「私が現在の重責を退任したら、もっと俳句に没頭することができ、ハイク・ヘルマンが誕生することでしょう」と予言なさった通り、日 EU 俳句交流大使となられた氏は、今回の私達のベルギー滞在中、ブリュッセルの美術館巡り、国境を越えたオランダの「ハイクパーク」の案内など、4日間もつき合って下さったのだ。恐縮する私達に、「私は俳句大使ですから」と、誇らしげに胸を張った笑顔が忘れない。

私の講演は、ルーヴェンカトリック大学のヴァンデワラ名誉教授が逐一英語に訳してくださり、講演の後の質疑応答も傍らで懇切に通訳してくださった。

その折に出た質問の中で、俳句の音韻に関わる質問が私には新鮮だった。英語の I love you は三音節だが、日本語では三音節では「わたし」だけしか言えない。言語の仕組みによって音韻、音節は異なるので、難しい問題だと思っていた。ところが、ヴァンデワラ氏が「好きだ、と言えば？」と言われたのは、まさに目から鱗だった。

実に流暢な日本語を話されるヴァンデワラ氏は、ルーヴェンカトリック大学の元日本学部長。600年の歴史あるこの大学は、エラスムスやトマス・モ

アが教鞭をとったことでも知られる。打ち合わせに伺った折、大学図書館も案内してくださった。東洋のコーナーの漆塗りの書架には角川の俳句大歳時記全5巻も並んでいた。



駐 EU 大使公邸にて

翌日のワークショップでは、私達が毎週のように行っている句会をそのまま紹介した。出句短冊の代わりにカードを用意して、英語の俳句を3行に書いて2つ折りにして2句「出句」(closing time)。お盆の上でシャッフルして全員に2句ずつ配り

「清記」(clean copy)をしてもらう。清記用紙を回覧して2句「選句」(choose)。「披講」(announce)は、ヴァンデワラ氏が買って出てくださった。10名の句会参加者の中には、

ファンロンパイ氏は勿



俳句ワークショップ

論、三上ベルギー大使夫妻もいらした。数日前大使公邸の晩餐にお招きいただいた時、夫妻が俳句や句会に興味を示してくださいだったので、是非にと参加をお勧めしたのだ。

見学者の方が多い句会だったので、退屈されるのではないかと心配したが、私語は全くなかった。後で感想を聞いたところ、元EU大統領や現役の大使といった方々も、無記名で句を出して、誰の作品かわからないまま選ぶという句会の平等な仕組みに、大いに感動したということだった。私にとっては句会の魅力の再発見の旅となった。

帰国して大江健三郎自選短篇集を求め、1991年発表の「『涙を流す人』の榆」を読んだ。当時のECのエウロパリア祭「日本特集」の催しに招かれた作者が、N大使公邸の離れに滞在した折、中庭の榆の大樹に幼時の記憶を呼び覚まされる。木靈が時空を超えて呼びかけてくるような不思議な短篇だった。

公邸の中庭の榆は幻の大樹となってしまったが、1週間の滞在中、どこへ行ってもベルギーには大木が悠々と伸びており、枯木となっても堂々としているのが印象的だった。電線は地下に埋められているのだと聞いた。

東京では電線や信号機を優先して、街路樹は突如伐採されたりして虐げられている。自然との共存を首都の街路にも実現している姿に、成熟した文明のありようを見る思いがした。

— HI Club — (1)

MACK (CANADA)

●

Kombini culture  
world heritage site –  
hidden from tourists

— HI 選集 — (1)

マック (カナダ)

●

コンビニ文化の  
世界遺産のサイト  
観光客に隠れて

HYRCIUK, Marhall John Louis (CANADA)

●

shattered sapling  
a coyote's howl  
frozen in bark

リチューク, マーシャル ジョン ルイス (カナダ)

●

折れた苗木  
コヨーテの遠吠え  
樹皮に凍る

M. Erdenebat (Inner Mongolia)

●

In the starry night  
sleeping in a field  
like a full moon

M・エルデニバト (内モンゴル)

●

星夜に  
野宿の羊たち  
満月の如し

Besuud.Khastsetseg (Inner Mongolia)

●

Cattle manure fuel  
wrapped in the hem of a Deel  
mother is a blue world

ベスード・ハスツェツグ (内モンゴル)

●

牛糞燃料を  
デールの裾に包む  
母は青い世界

U.Urtnast (Inner Mongolia)

●

Your lips  
the sweetness of apples  
and their sourness

U・オルトナスト (内モンゴル)

●

君の唇  
林檎の甘さと  
酸味

Bar Bold (Inner Mongolia)

●

I caress your pale skin  
with my gaze  
scribbles on the daybed

バー・ボルドー (内モンゴル)

●

色白の君を  
視線で撫でる  
榻の端書き

<p>KURODA, Motoko (U.S.A.)</p> <p>●</p> <p>At the revolving door making way for each other spring wind</p>	<p>黒田素子 (アメリカ)</p> <p>●</p> <p>ゆづりあう 回転ドアに 春の風</p>
<p>SHIMANE, Marie Annette (JAPAN / U.S.A.)</p> <p>●</p> <p>Late autumn; The old tree golden again</p>	<p>シマネ, マリエ アネット (日本 / アメリカ)</p> <p>●</p> <p>晩秋 老木 再び黄金色</p>
<p>DOI, Gisela (GERMANY / JAPAN)</p> <p>●</p> <p>Am Fahrschullenker – Schweiß der Angst noch spürbar. Ein sonniger Tag</p>	<p>土井, ギーゼラ (ドイツ / 日本)</p> <p>●</p> <p>教習車 汗の残り香 日が輝く</p>
<p>STOPAR, Rudi (SLOVENIA)</p> <p>●</p> <p>surface of the lake to cover the thick fog the invisible horizon</p>	<p>ストパール, ルディ (スロベニア)</p> <p>●</p> <p>湖面 濃霧で 見えない水平線</p>
<p>MOMOI, Beverly Acuff (U.S.A.)</p> <p>●</p> <p>passionflower his last planting blossoming</p>	<p>桃井, ベバリー (アメリカ)</p> <p>●</p> <p>パッション・フラワー あの人が最後に植えたものが いま花開いている</p>
<p>MACHMILLER, Patricia J. (U.S.A.)</p> <p>●</p> <p>wisteria a woman, her baby too dozing</p>	<p>マックミラー, パトリシア J. (アメリカ)</p> <p>●</p> <p>藤の花 母と赤子の ウトウトと</p>

WAZWAZ, Issam (JORDAN)  
●  
Windmills  
Lightly driven by the wind;  
A black cloud !

ワズワズ、イッサム（ヨルダン）  
●  
風車  
風に軽く動く  
黒い雲

LEE, Che-Yu (TAIWAN)  
●  
Sleeping mountain –  
Small hands  
In a baby carriage

李 哲宇（台湾）  
●  
眠る山  
ベビーカーより  
小さき手

（自訳）

## ～お知らせ～

国際俳句協会では第27回俳句大会を開催いたします。  
投句は HI167号に同封の用紙にてご応募下さい。  
(雑詠二句一組、投句料1000円、9月20日締切)  
12月の俳句大会では、表彰式及び講演会を下記の通り開催いたします。ぜひお誘いあわせの上、ご参加ください。

### 記

日 時：12月1日（月） 表彰式 午後1時～  
講演会 午後1時半～

講演会：講師 ロバート・キャンベル氏

「俳句と俳諧について」（仮題）

会 場：アルカディア市ヶ谷（私学会館）

会 費：6000円（軽食付き）

— HI 選集 — (2)

安原 葉 (長岡)

●

季の遅れとり戻す木々冬に入る

新田佐代子 (堺)

●

日没の風匂ふ浜秋の海

古郡孝之 (埼玉)

●

味噌蔵の土間の湿りやちちろ鳴く

佐藤宣子 (北海道)

●

海鳴りに応へてゐたる花芒

草野准子 (東京)

●

飛石の一つぐらつきうら盆会

田中あき子 (東京)

●

石の橋木の橋渡る宵涼み

— HI Club — (2)

YASUHARA Yo

●

Trees making up  
for the season's lost time —  
start of winter

NITTA Sayoko

●

A beach smelling  
of sunset breeze  
autumn sea

FURUKORI Takayuki

●

The dampness  
of the miso storehouse's dirt floor —  
a cricket cries

SATO Nobuko

●

Plume grasses  
responding  
to the sea's roaring

KUSANO Junko

●

One of the stepping stones  
is wobbling —  
Bon Festival

TANAKA Akiko

●

Crossing stone bridges,  
wooden bridges —  
summer evening breeze

西邑桃代（京都）

●

名月や松明揺らす通り雨

NISHIMURA Momoyo

●

Harvest moon —  
a passing shower  
shakes the torch

沼田博古（東京）

●

反骨の火種ほつほつ藪椿

NUMATA Hakuko

●

Flashpoints  
of resistance here and there —  
camellia

馬場吉彦（盛岡）

●

強霜や火山情報日々更新

BABA Yoshihiko

●

Heavy frost —  
updating volcanic information  
day by day

児玉星流（長野）

●

遠い戦争いつも胸に午後の向日葵

KODAMA Seiryu

●

A distant war  
always in my mind —  
afternoon sunflowers

三好かほる（埼玉）

●

冬麗ザビエル像は天を指し

MIYOSHI Kahoru

●

Sunny winter day —  
Xavier's stature pointing  
to heaven

時田 清（深谷）

●

小春日や長き技師生活明けぬ

TOKITA Kiyoshi

●

Balmy winter day —  
my long life as an engineer  
comes to an end

相沢恵美子（横浜）

●

冬の日の行き渡りたる古墳の野

AIZAWA Emiko

●

A field with ancient tombs  
where the winter sunlight  
spreads widely

水田博子（広島）

●

ひとりふたり別れて一人花野みち

MIZUTA Hiroko

●

Parting with one  
parting with another and now alone  
a path through the flower field

鈴木慕南（東京）

●

木靈宿る明治神宮秋深し

SUZUKI Bonan

●

Meiji Shrine  
where a tree spirit dwells –  
deep autumn

大西政司（愛媛）

●

ルビコン川渡る決心寒鳥

ONISHI Masashi

●

Determination  
to cross the Rubicon –  
winter crow

相沢正志斎（水戸）

●

大地震に右往左往の今年かな

AIZAWA Seishisai

●

The year went by  
in a whirlwind  
after the great earthquake

熊谷佳久子（札幌）

●

啼き交はす丹頂の群鶴居村

KUMAGAI Kakuko

●

A flock of red-crowned cranes  
calling to each other  
Tsurui Village

吉村玲子（三田）

●

寝入る子の重さを抱いて秋の雲

YOSHIMURA Reiko

●

Embracing  
the weight of a sleeping baby —  
autumn clouds

権守いくを（神奈川）

●

ななかまど食べて私は赤い鳥

GONNOKAMI Ikuo

●

Having eaten  
rowanberries, I'm now  
a red bird

ちづこ（東京）

●

湯煙に秋冷の肩ほどけゆく

CHIZUKO

●

In the hot spring mist  
my autumn-chilled shoulders  
gently relax

坂田節子（埼玉）

●

利根の風吹きて喜ろこぶ掛大根

SAKATA Setsuko

●

Hanging radish  
delighted by the wind  
blowing from the Tone River

西倉ムツ子（埼玉）

●

浅間富士煙はきはき山眠る

NISHIKURA Mutsuko

●

Asama-Fuji  
steadily smoking —  
a sleeping mountain

月城花風（東京）

●

父母を一人占めせし泣初

TSUKISHIRO Kafu

●

First cry  
the baby has Mom and Dad  
all to itself

根津静江 (函館) ● 日の陰る木の實落ち音軽きかな	NEZU Shizue ● The sun grows dim acorns fall with a soft sound
山岸三四子 (東京) ● 浮寝鳥ときにまなこを開けにけり	YAMAGISHI Miyoko ● Floating sleeping birds sometimes open their eyes
矢野真緋子 (広島) ● ひろしまや被爆菩提樹ひこばゆる	YANO Mahiko ● Hiroshima — a bombed Bodhi tree sprouts from its base
菊池熱海 (東京) ● 高層の街の孤独や寒落暉	KIKUCHI Nekkai ● Loneliness of high-rise city — cold sunset
菊池恵海 (東京) ● 屯田の裔なり夫の石狩鍋	KIKUCHI Keikai ● Ishikari-nabe cooked by my husband, a descendant of <i>Tonden</i> pioneer-soldiers
福田ひさし (埼玉) ● 廃校の階段に差す冬日かな	FUKUDA Hisashi ● Winter sun on the stairs of an abandoned school
桂 香 (函館) ● はらから永遠の旅立ち今朝の雪	KEIKA ● The eternal departure of my kindred — this very morning's snow

— HI 選集 — (3)

介弘紀子 (福岡)

●

風に打つ句点読点吾亦紅

和田 仁 (秋田)

●

万緑を抜け出て来たるローカル線

岡西宣江 (千葉)

●

再会は小さな駅や返り花

北端辰昭 (奈良)

●

亡き母にありしや嫁の座秋茄子

斎藤澄子 (東京)

●

うなぎ屋の予約も一人土用の日

鈴木帰心 (刈谷)

●

木の実落つ湖に二枚の鳥の羽根

— HI Club — (3)

SUKEHIRO Noriko

●

Burnet

striking punctuation and reading marks  
into the wind

WADA Jin

●

A local train cars  
emerging from  
the myriad green leaves

OKANISHI Nobue

●

A small station  
where we meet again —  
second blooming

KITABATA Tatsuaki

●

Did my late mother  
ever have the status of a wife?  
autumn eggplant

SAITO Sumiko

●

Now just a single  
reservation for eel  
Midsummer Day of the Ox

SUZUKI Kishin

●

Nuts falling —  
two bird feathers  
on the lake

佐藤みちゑ（東京）

●

スケボーの少年高く秋を跳ぶ

SATO Michie

●

A skateboarding boy  
leaps high  
into autumn

神山姫余（栃木）

●

北方の便りかすかに雪の香

KAMIYAMA Himeyo

●

A letter  
from the north — faint scent  
of snow

飯川三無（川崎）

●

綿虫のふはりふはりと山日和

IIKAWA Sanmu

●

Woolly flies  
fluffily flying —  
mountain sunlight

原田静子（埼玉）

●

秋桜の揺れて風知る昼下がり

HARADA Shizuko

●

Feeling the wind  
as the cosmos sway  
early afternoon

清水暁子（北海道）

●

噴水の仕組み教へて父の顔

SHIMIZU Akiko

●

Explaining how  
the fountain flows  
a father's proud face

川口比呂人（鎌倉）

●

人群れて壁の隙間に雪の富士

KAWAGUCHI Hiroto

●

People gathering —  
through a gap in the wall  
snowy Mt. Fuji

葛生みもざ (東京)  
●  
極月の祈りの重さ シュトーレン

KUZUU Mimoza  
●  
Stollen –  
prayers' weight  
in the last month of the year

上村凡次 (函館)  
●  
青空や稲穂輝く山の裾

KAMIMURA Bonji  
●  
Blue sky –  
shining rice ears  
at the foot of the mountain

福原詠風子 (函館)  
●  
風貌は変われど友と温め酒

FUKUHARA Eifushi  
●  
Though our looks  
have changed...  
hot sake with a friend

草野章次 (浜松)  
●  
オレンジのTシャツの背に揚羽蝶

KUSANO Shoji  
●  
A swallowtail butterfly  
on the back  
of an orange T-shirt

逸見真三 (千葉)  
●  
はらからの別れ幻落花急

HENMI Shinzo  
●  
A phantom farewell  
to my kindred –  
fast falling cherry blossoms

筒井慶夏 (沖縄)  
●  
灯台のあをき光芒残る虫

TSUTSUI Keika  
●  
The blue glow  
of a lighthouse –  
remaining insects

今泉かの子（名古屋）  
●  
冬天や翼をひろぐ獅子の旗

IMAIZUMI Kanoko  
●  
Winter sky –  
a lion flag  
spreading its wings

石綿久子（東京）  
●  
湯豆腐の部屋一パイの笑い声

ISHIWATA Hisako  
●  
Laughter filling  
the room where we enjoy  
hot tofu

細川みちえ（愛知）  
●  
深々と降り積む雪の隠し事

HOSOKAWA Michie  
●  
Secrets  
hidden by deep snow  
falling and accumulating

永井玲子（神奈川）  
●  
冬青空恐竜を見に水素カー

NAGAI Reiko  
●  
Blue winter sky –  
taking a hydrogen car  
to see the dinosaurs

楫原夢乃（周南）  
●  
コーヒーや昭和工業地帯冷ゆ

SUGIHARA Yumeno  
●  
Coffee –  
a Showa industrial area  
gets chilly

宮田 勝（石川）  
●  
米櫃を洗ふ勤労感謝の日

MIYATA Masaru  
●  
Washing  
a rice bin  
Labor Thanksgiving Day

菊池幸恵（茨城）

●

寄せ書きが囲む遺影や冬北斗

KIKUCHI Sachie

●

A portrait of the deceased  
surrounded by people's good wishes —  
winter Big Dipper

西上禎子（大阪）

●

盗掘の洞這ひ出でて冬の蜂

NISHIGAMI Teiko

●

A winter bee  
crawling out  
of an illegally-dug hole

草刈幸風（東京）

●

艤綱を食ひ千切らむと虎落笛

KUSAKARI Kofu

●

Trying  
to bite off the hawser  
whistling winter wind

高橋紀美子（神奈川）

●

冬ざるるカレー市民の首の縄

TAKAHASHI Kimiko

●

The nooses around the necks  
of the Burghers of Calais —  
bleak winter

安富明路（北海道）

●

どんぐり落つ気配をちこちけものみち

YASUTOMI Akiji

●

Animal trail  
with signs of animals here and there  
acorns fall

石井洋子（三重）

●

締めつける通草や柱の細るほど

ISHII Yoko

●

The akebia vine tightens  
so much that the post  
becomes thinner

木下さとし（三田）  
●  
年忘れ世界遺産の地酒愛づ

KINOSHITA Satoshi  
●  
End-of-year party  
enjoying the local sake;  
The World Heritage

太高霧海（東京）  
●  
登高や名誉区民の誇り顔

OHTAKA Mukai  
●  
Ascending a height –  
a proud face of the honored resident  
of the ward

（HI 選集①～③  
村上博幸訳  
）

（HI club ①～③  
Translation by  
Hiroyuki Murakami  
）



—— HI 選集 —— ④

悟（愛知）

●

昨日より遠くに今日のつくつくし

結菜やよひ（神奈川）

●

測量士ミリも違わぬ炎天下

陽 二（西蒲田）

●

ロシア避け中国を飛ぶ夏トルコエア

清水京子（名古屋）

●

虫鳴くや草に覆はる廃れ窯

松山芳彦（埼玉）

●

ナバダイの駱駝の列に星の降る

福島芳子（埼玉）

●

赤とんぼドーバー海峡の空気をつれて来る

—— HI Club —— ④

SATORU

●

Chirping farther  
than yesterday's  
today's autumn cicada

YUNA Yayohi

●

Surveyors  
accurate to the millimeter  
under the blazing sun

YOJI

●

Avoiding Russia  
Turkish Air flying over  
summer of China

SHIMIZU Kyoko

●

Crickets chirping —  
grasses spreading all over  
the ruined kiln

MATSUYAMA Yoshihiko

●

filled with stars  
on the row of camels  
in Navadi

FUKUSHIMA Yoshiko

●

Red dragonflies  
bring the air  
of Dover strait

望月吉々 (北海道)

●

蠍螂を育てて我也肉食系

MOCHIZUKI Yoshi-yoshi

●

Makiri-kor-pattaki ku=resu  
Kuani ka kamenop ne ku=an

小泉裕子 (岐阜)

●

新涼の旅駅ごとにちがふ風

KOIZUMI Yuko

●

early autumn trip —  
each wind blowing  
at each station

チョウコ ビーン (熱海)

●

虚空より夫の面影返り花

BEEN Choko

●

from the void  
my husband's shadow  
reflowering!

末永玲子 (函館)

●

国乱の大地見下ろす天の川

SUENAGA Reiko

●

overlooking  
the wars on Earth  
the Milky Way

山戸暁子 (堺)

●

黄金のトンネル抜ける樅林

YAMATO Akiko

●

Das Buchenwäldchen  
durch den goldenen Tunnel  
einsam wandre ich

ヘンリー殿様 (東京)

●

己が愚を笑ふほかなし枯れ尾花

HENRY Tonosama

●

C'est ma sottise sur laquelle  
on ne peut plaisanter  
Ah! l'herbe de pampas morte

久永小千世（知立） ● 神棚の遺影穏やか胡蝶蘭	HISANAGA Sachiyo ● His photo on the shelf his face is as gentle as he was — white orchid in a basin
祚 崑（函館） ● 文化の日遺産破壊の音に泣く	SOIN ● Culture Day the sound of destroying heritage feel like crying
池田松蓮（東京） ● 釣竿のやうに撓うて雪柳	IKEDA Shoren ● Como cañas de pescar se doblan las espireas
白根順子（埼玉） ● 夜のじまポインセチアが騒ぎ立て	SHIRANE Junko ● Only poinsettias are making a fuss in a silent midnight room
工藤眞一（東京） ● 解き放つ日蔭の惑ひ青木の実	KUDO Shinichi ● Die Täuschung des schattigen Platzes lässt die Aoki-Frucht frei
川原千秋（東京） ● ボジョレーの解禁霜夜のワイン風呂	KAWAHARA Chiaki ● Frosty night wine bath Today is Beaujolais Day

永井弘子（茨城）

●

初夢や百歳で教壇に立ち

NAGAI Hiroko

●

On my first dream of the year,  
I go into teaching  
at the age of one hundred

西川盛雄（熊本）

●

コスモスを照らす花野の広さかな

NISHIKAWA Morio

●

how large is  
the floral space of cosmos,  
shedding light on

小上栄女（和歌山）

●

股にみかん置きて二歳児みかん剥く

OGAMI Shigejo

●

A two-year-old boy  
with mikans between his legs  
peeling mikan

越智淳子（横浜）

●

葡萄園ひろがる丘に威銃

OCHI Junko

●

a vineyard  
in the vast hills  
sounds of the warning gun

小松 萌（神奈川）

●

落葉道手をつないでもいいですか

KOMATSU Moe

●

Shall we hold hands  
if it's a path  
of fallen leaves?

春木小桜子（大阪）

●

干布団に日のぬくもりを畳みけり

HARUKI Saoko

●

fold up futon  
with sunlight  
it is still warm

石澤幸子（京都）

●

白血球数に多寡あり余寒あり

ISHIZAWA Sachiko

●

leukocyte —  
sometimes increase sometimes decrease  
still cold in early spring

毬矢まりえ（東京）

●

鉄骨は彼の玉座なり寒鴉

MARIYA Marie

●

it's his throne  
the steel frame  
— winter raven

幸 湖（滋賀）

●

天地の間惑はす濃霧かな

KOUKO

●

Le brouillard épais,  
il confond  
le ciel et la terre

山本浪子（川崎）

●

錦秋や構内抜けてイコン展

YAMAMOTO Namiko

●

Autumn glory...  
walking through the campus  
for an Ikon exhibition

各務恵紅（岐阜）

●

休みたる蜻蛉や翅に弛みなし

KAKAMI Keiko

●

Resting dragonfly;  
its wings  
have no slack

中村和江（深谷）

●

風なきや日はきらきらと冬の川

NAKAMURA Kazue

●

no wind noon —  
the sun shines sparkly  
over the winter river

小野香久子（東京）

●

柚子湯の香と湯気を振りまき幼逃げ

ONO Kakuko

●

splashing  
the perfume and the steam of Yuzuyu  
a child running around

岡 哲夫（和歌山）

●

遠き日の話は尽きず秋夕焼

OKA Tetsuo

●

endless talking  
about memories of distant days  
autumn evening glow

天野松男（福岡）

●

秋の夜や逃げる彗星細くなり

AMANO Matsuo

●

autumn night  
going comet far away  
grows thin

内村恭子（東京）

●

ああドアはオートロックよ寒昴

UCHIMURA Kyoko

●

Oh no  
the door is self-locking...  
shivering Pleiades

(HI 選集④自訛)

## —HI 167号 投句作品より / From HI No.167—

### 【選評】

HIA 監事 津高里永子

Selection and review by Rieko Tsutaka, HIA Auditor

### ■第1位■

DOI, Gisela (Germany / Japan) / 土井、ギーゼラ（ドイツ / 日本）

Am Fahrschullenker – / Schweiß der Angst noch spürbar / Ein sonniger Tag

教習車 / 汗の残り香 / 日が輝く

(評) アウトバーンなどの高速道が整備されているドイツでは運転免許は必要不可欠だろう。調べてみると、自動車の教習所に通うにはドイツでも日本と同じくらいの金額を払わないといけないらしい。夏の長い休みの間に取得しようと通い始めた作者。教習車に乗り込むと、直前に乗っていた教習生の汗の匂いがした。みんな、ぎらぎらとした太陽のもと、必死なのである。

In Germany, where the autobahn and other highways are well-developed, a driver's license is probably indispensable. I found out that people have to pay about the same amount of money in Germany as in Japan to attend a driving school. The author started to go to the school to get a license during the long summer vacation. When she got into the learner's car, she smelled the sweat of the student who had been in the car just before her. Everyone must be frantic under the glaring sun.

### ■第2位■

宮田 勝 (石川) / MIYATA Masaru

米櫃を洗ふ勤労感謝の日

Washing / a rice bin / Labor Thanksgiving Day

(評) 米がなくなってきて底が見えるほどになった米櫃。改めて見てみる

と、けっこう汚れているのに気がついた。そういえば、今日は勤労感謝の日。炊飯器の釜はもちろんのこと、米櫃も時には洗ってやろうと思い立つ。一生懸命働いている人たちへの感謝と同じくらいに、自分たちが使っているものへの感謝も忘れない作者のあたたかなこころが読み取れる。

The rice in the bin has run out and the bottom is now visible. When the author looked at it again, he noticed that the bin itself was quite dirty. By the way, today is Labor Thanksgiving Day. He decided to wash not only the rice cooker pot but also the rice bin this time. We can see the warm heart of the author through this haiku. As he is not only grateful to those who work hard, but is also thankful for the things he uses.

### ■第3位■

Besuud.Khastsetseg (Inner Mongolia) / ベスード・ハストセツグ (内モンゴル)

Cattle manure fuel / wrapped in the hem of a Deel / mother is a blue world  
牛糞燃料を / デールの裾に包む / 母は青い世界

(評)「デール」というのは長袖で合わせ目が右側にあり、帯を締めるモンゴルの民族服のこと。牛糞を乾燥させた燃料（アルガル）をくべた煙は芳ばしかったとモンゴルを訪れた友人が教えてくれた。大空を表す青は、モンゴルの国旗にも用いられ、忠誠、献身、尊敬の色とされているそうで、母への敬愛や慈しみの念へとつながっていく青でもある。

“Deel” is a Mongolian traditional dress with long sleeves, the seam on the right side, with a sash. One of my friends who visited Mongolia told me that the smoke from the fuel (argal) made from dried cow dung was fragrant. Blue, which represents the sky, is also used in the Mongolian flag and is said to be the color of loyalty, devotion, and respect to mother.

### ■第4位■

池田松蓮（東京） / IKEDA Shoren

釣竿のやうに撓うて雪柳

Como cañas de pescar / se doblan / las espireas

(評) 枝の先までびっしりと小花をつけ、風にふくらんだり、揺れたりする雪柳。その白さを、それも水辺で見つけたならば、それこそ、風とともに春がやってきたという感動を覚えることと思う。掲句は「釣竿のやう」という描写によって、水べりであるということを思わせ、さらに、釣竿という措辞から連想する心の弾みも感じさせ、すっきりと省略の効いている句。

The snow willow has many small flowers all the way to the tips of its branches, which swell and sway in the wind. If you find its whiteness by the water, you will feel the sensation that spring has come with the wind. The description of “like a fishing rod” in this haiku reminds us of the waterside, and the phrase “fishing rod” also evokes a feeling of excitement, making this a clean-cut haiku.

## ■第5位■

小上栄女（和歌山） / OGAMI Shigejo

股にみかん置きて二歳児みかん剥く

A two-year-old boy / with mikans between his legs / peeling mikan

(評) さすが、和歌山っ子、まだ二歳なのに、自分でみかんを剥こうとするなんて。きっと、とっても甘いみかんなんだろう。ぺたっと足をひろげてすわった中に置いたみかんは私のもの、と幼いながらに主張している可愛しさ。まわりの人たちのあたたかいまなざしも感じられて、「みかん、二つ目だよ。おなか大丈夫かね」などという、ほほえましい会話も聞こえてきそう。

As expected of a Wakayama boy ! Even though he is only two years old, he tries to peel mikan by himself. They must be very sweet mikans. Sitting and spreading his legs, placing the mikan between his legs, and he insists this mikan is mine. It is so cute. I can hear the conversation of the people watching him. “Boy, it's your second one. Is your tummy OK?”

* HI 投句作品の選評は、HIA 役員が順番に担当します。

* HIA directors will take turns in the selection and review of the haiku.

## 後記 「ハイクパークを訪ねて」

2025年2月、EU 欧州連合と日本の文化交流50周年記念事業に当協会理事の西村和子先生が招かれ、私も10年ぶりにベルギーの首都ブリュッセルに同行する機会を頂いた。記念事業は二日間にわたり、日・EU 俳句文化交流大使のヘルマン・ファンロンパイ氏による「俳句は詩であり生き方である」の講演、西村和子氏による「俳句の魅力」の講演、続く日本の句会形式を紹介するハイクワーカークショップがEU大使公邸と日本文化センターで開催された。ヨーロッパ各地から集まったハイク愛好者に大変な好評を博したと EU 日本政府代表部のHPに報告が上がっている。それぞれの講演内容は、当協会HP (<https://www.haiku-hia.com>) でご覧いただきたい。

「ハイクパーク」という言葉を初めて知ったのはだいぶ前だった。俳句ユネスコ登録推進協議会名誉顧問のヘルマン・ファンロンパイ氏から「どこぞにこんなものを作ったよ」という写真をメールで頂いたときは、ピンときてはいなかった。せっかくの今回のブリュッセル訪問、以前から気になっていたハイクパークに行ってみたいと大使館との日程調整に入れて頂いたものの、その場所はファンロンパイ氏しかご存じでなかった。ファンロンパイ夫人の運転するBMWでブリュッセルから二時間ほど北西に向かった堤防の上にハイクパークはあった。そこには21名のオランダ人ハイクのパネルが「ハイクとは」という説明のパネルとともに砂地に並んでいた。

その村、カトザンド (Cadzand) は、北海に面したベルギーから国境を越えたすぐにある人口695人のオランダの小さな村である。カトは堤防を、ザンドは砂を意味するこの地方フランダースの言葉である。なぜこんなところにハイクが? という疑問は、その建立に協力をした関係者のパネルを見るとわかる。この景色のよい場所をもっと人々に知らせたいと考えた地域の水管理局、沿岸アドバイザー、ホテル会社などの名前が書かれている。海岸を散歩する人がふらっと立ちどまり、パネルを見て「ハイクって何?」と思ってくれるに違いない静かな自然に囲まれたハイクに相応しい景色が広がる場所なのだ。

日本発祥のハイクが、haikuとしてこの村に現地の言葉で描かれているのは、ファンロンパイ氏のハイクへの熱い心のおかげだと思う。ハイクパークから10分ほど歩いた海辺には、村で一軒の高床式の大きな建物が見えた。「海賊」という名前のそのレストランの大きなガラス窓から拡がる北海は、バイキングが活躍した北欧の国々とも海でつながっている。近い将来、人々が砂浜に憩い、海に癒される素敵な村になっていることが容易に想像できた。

ハイクパークには、俳句作品のパネルの他に、「俳句とは」と説明するパネルが展示されている。

「俳句は、国際的なジャンルに成長した日本の詩の形式である。語源的には、俳句の語源である俳諧は、陽気な詩を意味する。実際、俳句は写真の印象を言葉にしたものである。俳句とは、存在を体験することである。それは言葉では表現できないが、言葉で示唆することはできる。良い俳句は、読者に詩人の言葉とその経験について考えさせる。俳句は、通常5-7-5音節の3行で構成される。俳句は音節が少ないほど強くなることもある。最終的に、重要なことは読者に微笑みをもたらせるかどうかである。」  
(藤本はな)



Cycling along the dike

View of the eternal sea

Dreaming and thinking

Herman Van Rompuy

堤防をサイクリング

果てしない海を眺め

夢を見て考える

ヘルマン・ファンロンパイ

---

* p 2の大高霧海氏の俳句は、「俳壇」3月号より転載しています。

## 〈俳句ユネスコ登録推進協議会加盟自治体首長エッセイ〉

### 俳句を身近に感じられるまち“いちかわ”を目指して

千葉県市川市長 田中 甲

市川市は、千葉県の北西部に位置し、江戸川の豊かな流れや緑あふれる景観が広がるとともに、都心に近く利便性と落ち着いた住環境が共存する住宅都市です。北部丘陵地帯には堀之内貝塚、曾谷貝塚をはじめとする数多くの遺跡があり、7世紀には下総の国府が置かれ、今なお多くの文化財や伝統が残る文教都市として発展してきました。また、南部の行徳地域では古くから塩づくりが行われており、戦国時代には江戸湾岸における最大の塩の生産地となりました。江戸時代には徳川家康が行徳の塩業に対して手厚い保護を行い、航路や街道の整備が行われ「行徳千軒寺百軒」と言われるほど賑わい、成田山詣の中継点としても発展しました。現在も神輿製造に関わる人々が居住し、地域独自の祭礼が盛んな寺社町として知られています。

市川市では様々な文化が育まってきたが、特に俳句とはゆかりが深く、江戸時代には松尾芭蕉や小林一茶、明治以降には正岡子規、高浜虚子、水原秋櫻子などの著名人が市川の風景を詠んでいます。戦後は本協議会の能村会長のお父上である能村登四郎氏をはじめ、多くの俳人が市内に居を構え、俳句結社や句会による盛んな活動が今日まで続いており、その足跡として、多数の句碑、歌碑が建立されています。

「梨咲くとかつしかの野は とのくもり」水原秋櫻子

「真間寺で斯う拾ひしよ 散紅葉」小林一茶

これらの句からは、文化人たちが市川市で過ごした当時の様子や風景を想像させられます。どこか郷愁をかきたてられるのも、俳句の魅力の一つだと感じます。

市内には俳句を愛好する方が多く、能村会長を中心とする市川市俳句協会との共催で開催されている「市川市市民俳句大会」は、昨年で76回を迎えました。さらに、前年度には市内の小中学生を対象とした「市川市ジュニア俳句大会」も実施され、世代を超えて俳句に親しむ機会が広がっています。また、市川市に今なお語り継がれ、万葉集にも詠われた「真間の手児奈」を冠した全国公募の文学賞「市川手児奈文学賞」には俳句部門があり、毎年多くの作品が寄せられています。

これからも市民の皆様が俳句を身近に感じられるよう、文化都市いちかわとして精一杯努めてまいります。そして日本の伝統文化である俳句がユネスコの無形文化遺産に登録され、世界の人々に親しまれる文化となる一助になれば幸いでございます。

**HAIKU INTERNATIONAL No.167**

定 價	1,000円（含年会費）
Price	年会費10,000円
発行日	令和7年5月31日
Date of issue	May 31, 2025
発行所	国際俳句協会
Publisher	HAIKU INTERNATIONAL ASSOCIATION
住 所	〒162-0843 東京都新宿区市谷田町2-7 東ビル7F
Address	7F AZUMA BLDG. 2-7, ICHIGAYA TAMACHI, SHINJUKU-KU, TOKYO 162-0843 JAPAN
電 話	03-5228-9004
Fax	03-5228-9007

表紙書 町 春草  
cover calligraphy MACHI Shunsō

●会 長 大高 霧海

●事務局長 木村 聰雄

●翻 訳 村上 博幸

●編 集 内村 恒子

ホームページアドレス <https://www.haiku-hia.com>  
俳句ユネスコホームページアドレス <https://unesco.haiku-hia.com>  
協会メールアドレス [info_hia@haiku-hia.com](mailto:info_hia@haiku-hia.com)

送金口座名「国際俳句協会」  
ゆうちょ銀行振替貯金 00190-1-536945  
三菱UFJ銀行新丸の内支店(普) 422-1028936